

湯守、湯屋を買った犀の主に主流しでまんこ
を使われ潮を吹く

R18

2026
・
10
・
10

目次

第
01
話

第
02
話

第01話

若旦那は、荷車が着く前に裏口から出ていった。番台の上には、売り渡しの書き付けと鍵の束だけが残っていた。

昼前、松の湯の玄関に荷車が止まった。入ってきた男は、鴨居をくぐるのに額の角を先に下げた。灰色の厚い皮をした犀で、肩は玄関の引き戸一枚ぶんの幅がある。

「園部さんだろ。轟だ。今日からここの主になった。分かってるよ、俺みたいなのが入ってくれば客は驚くさ。だから開ける前に来

「たんだ」

「驚きやしないよ、旦那。湯屋はだれでも裸になる所だからね」

園部は番台から下りて鍵を渡した。洗い場の戸が開いて、千歳が出てきた。長い耳の先から、しずくが落ちている。さらしの腹掛けに、ひざ上までの股引。兎の湯守は、ぬれた手を股引の横でふいて頭を下げた。

「湯守の千歳だよ。……よろしく、旦那」

「お前が流しをやるのか。若旦那から聞いたぞ。先月の給金がまだそうじゃないか」

轟は懷から紙包みを出して、番台の端に置いた。

「若旦那の分は俺が払っとく。前の主の借りを残したまま働かせるのは、気持ちが悪いと思ってな」

千歳は包みを見た。手は出さなかった。

「……どうも」

「それと園部さん、品書きの板に一行足しといてくれ」

番台の横には、墨で書いた板が掛かっている。入浴、流し、髪洗い。番台の横の柱の高い釘には、「流し、辰」と書いた古い木札がまだ下がっている。轟は髪洗いの下の空いた所を指でたたいた。

「主流し、でいい。俺が客で、こいつが流す。それだけの行だ」

「客に聞かれたら、何て答えるんだい」

「主しか受けられない、と言えはいいだろ」

「流しなら、上の行でできるよ」

千歳は板から目を離さなかった。

「上の行は背中だけじゃないか。俺は背中だけで出来てる男じゃないんだ」

園部は筆を取って、主流し、と書いた。あるじながし、と読む。

墨が乾くまで、千歳は板を見上げていた。それから何も言わずに洗い場へ戻った。

昼を過ぎると、いつもの顔がそろった。瓦屋のじいさんは湯船のいちばん奥に沈み、魚屋は番台の前で帯を解きながら園部に聞い

た。

「角のある旦那が新しい主かい。でかいねえ。あれが入ったら湯があふれやしないか」

「あふれたら足すよ。まきは旦那が出すそうだから」

その轟が、客として洗い場に入った。手ぬぐいを脱衣場に忘れていったので、園部は風呂敷ほどもあるそれを持って、あとから戸を開けた。

流し場は戸を入れてすぐ左、太い柱の陰にある。隣の腰掛けでは、流してもらったばかりの左官が首を垂れて寝息を立てていた。千歳の手にかかる、客はたいていこうなる。

轟は腰掛けに座っていた。千歳はその背中に片ひざを当て、右の肩の下にひじを立てて、体の重みをぜんぶ掛けていた。こった所を先にほぐして、それから垢すりでこする。順番はいつもと同じだが、ひじまで使う千歳を園部は初めて見た。

「旦那、石でしょ。右で担いでた。肩の下が、右だけ岩みたいにな
ってる」

「石だと分かるのか。聞かれもしないのに当てるんだな、お前は」

「さわれば分かるよ。……旦那、よそで流してもらったこと、あんまり無いでしょ。皮が、押され慣れてない。力、抜いて。寝ていいから」

「寝ないよ」

轟の目は開いていた。床の石をにらんで、太い首に筋が立っている。

「……あるさ。按摩にも床屋にも行つた。指の先でなでられて帰されただけだな。寝るところじゃないんだ、今は。皮の下まで届いてるじゃないか、お前の手は」

千歳は垢すりの布を取って、灰色の背を上から下へこすり始めた。左官が、がくりと舟をこいだ。轟のまぶたは最後まで落ちなかった。

上がった轟は、番台に流しの代を置き、心づけも足した。

「今のは背中の方だ。残りは、のれんを入れてからにする」

そのあと千歳は、魚屋の背中をいつもの倍の速さで流した。魚屋は寝るひまも無く湯船へ追いやられた。

日が落ちて、のれんを入れた。下足箱の釘を見ていくと、二十七八番の札が無い。客が手首に結んだまま洗い場で落としていくことが、年に何度かある。園部は竹の棒を持って洗い場に入った。

「ちとせ、溝をさらわせとくれ。下足札が一枚足りないんだよ」

「いいよ。奥の、湯船のきわが詰まりやすいから、そっちから見て」

千歳は流し場でぬか袋をしぼっていた。さらし木綿を二重に縫った、手のひらほどの袋だ。園部は湯船の横にしゃがんで、溝のふた

を一枚ずつ上げていった。

戸が開いた。轟は裸で、手ぬぐいを一本肩に掛けていた。流し場の腰掛けに座ると、木がみしりと鳴った。

「続きた。前も、下も、全部だ」

千歳は袋を持ったまま、奥を見た。園部は棒で溝の底をこすつて、音を立てた。

「園部さんは探し物だろ。湯気もあるし、柱もある。気にしないでやれよ」

「……前は、自分で洗うもんだよ、旦那」

「自分の手じゃ、洗った気がしないんだ。お前の手は効いたじゃないか。効く手がここにあるのに自分でやるのは、損だと思つてな。板の一行は、このために足したんだ」

千歳は袋を湯にひたして、轟のひざの間にしゃがんだ。腹掛けも股引も、昼の仕事でぬれたままだった。胸、わき、腹。手は昼と同じ調子で進み、へその下で止まった。

「瓦屋のじいさんに聞いたぞ。お前は背中をさわれば、客の商売を当てるそうだな。前も読めるんだろ。読んで、口に出してみろよ」

園部は湯船のきわの壁ぎわにしゃがんでいた。そこからだと柱が横へずれて、流し場の二人が斜めにまるごと見えた。洗い場の水

は、戸口の側から流し場の前を通り、園部の足もとの穴へ落ちる。

釜の火が細って湯気は薄く、柱の灯が二人を照らしていた。

千歳の両手が、轟の右の腿の付け根に入った。

「……石。やっぱり右。担ぐ時に、こっちの足で踏んばってたでしよ。付け根の筋が、右だけ縄みたいに固い。左はかばってて、使ってない。だから腰が左へ逃げるんだよ。旦那、長く歩くと左のひざが先に笑うでしょ」

「当たってる。医者にも言われたことが無いぞ、それは」

手が下がった。千歳は金玉を下から手のひらに受けた。片方だけで手のひらが埋まり、指のあいだから灰色の皮がはみ出した。千歳

の言葉は、そこで止まった。

「そこは何屋なんだ。読めるんだろ」

答えのかわりに、手が速くなった。ぬか袋が金玉の裏を回り、しわをのばし、腿との境をこすり上げる。白いぬかの汁が、轟の内腿を伝って落ちた。

「黙るのか。まあ、そこは人にさわらせたことの無い所だ。読めなくて当たり前だろ」

轟のちんぽは、千歳の顔の前で起き上がっていた。幹は皮と同じ灰色で、先だけが赤黒い。太さは千歳の手首よりあり、長さは千歳のひじから先ほどあった。

千歳は壁の釘から、筒のへちまを取った。腕やすねを通して洗う道具だ。いつもの段取りのまま、赤黒い先にかぶせて押した。半分も入らないうちに、筒がみしつと鳴って縦に裂けた。

千歳は裂けたへちまを持ったまま、動かなかった。長い耳の先から、湯が一滴落ちた。

「分かってるよ。合う物が無いんだ。ふんどしだって反物から縫わせてる。裂けた分は俺が買って返す」

「……いいよ、へちまくらい」

「金玉の時は黙ったな。ちんぽでも黙るんだろ、お前の手は」

千歳はへちまを置いて、素手で握った。握ったまま、少しのあいだ手を動かさなかった。

「……ここ、人にさわらせてないでしょ。皮がほかと違う。背中
岩なのに、ここだけ薄くて、指が沈む。使いこんだ所の皮じゃない
よ、これ」

「読めるじゃないか。さわらせなかったんじゃない。さわる者がい
なかったんだ。見ただけで後ろへ下がるからな、たいていは」

千歳は両手を上下に分け、石けんを泡立てて、根元から先へしご
き上げる。先のふくらみは、親指の腹で円を描いて洗った。力を入
れない、軽い手つきだった。

「弱いな。なでてるだけじゃないか。お前までそれをやるのか。昼の手はどこへ行つたんだ」

千歳は口を結んだ。握りが変わった。両の親指で根元の筋を深く押しこんでから、こする。昼に背中へやったのと同じ順番で、手首から先に体の重みが乗っていた。ぐじゅ、ぐじゅ、と泡のつぶれる音が洗い場に響いた。

「……それだよ。そこまで握った者は、いないんだ」

轟の足の指が、石の上で開いた。腿の筋が盛り上がり、腰掛けがまた鳴った。赤黒い先の口から透明な汁がにじんで、泡の上に玉になった。

「荒いな」

「荒くないよ。速いだけだよ」

「速いのはいい。だが下からじゃ、腕が伸びきってるだろ。力が逃げてるじゃないか。ここに乗れよ。俺の腿は高いが、落ちそうなら腕につかまっつていい。俺は動かないから」

轟は左の腿をたたいた。千歳は立って、その腿をまたいで腰を下ろした。足は床に届かず、宙に浮いた。向かい合った二人の間で、ちんぽは千歳の胸の高さまで立っていた。

「冷たいじゃないか。ぬれた股引でひざに乗られるとな。脱げよ」
千歳の両手が、ちんぽから離れた。

「……脱がない」

「なんでだ」

返事は無かった。園部は溝のふたをもう一枚上げた。札は無かった。

「傷か。それなら気にしなくていいぞ。山には指の足りないやつも、石にはさまれて尻のえぐれたやつもいた。それを笑った者は、俺が山から下ろしたんだ」

「……傷じゃない」

「じゃあ恥ずかしいのか。男同士じゃないか。俺のほうは昼から丸出しで洗わせてるんだぞ」

千歳は下を向いていた。轟は首をかしげ、太い指を千歳の腰の紐へ伸ばした。

「ああ、結び目か。ぬれると固くなるからな。それなら俺がほどこいて」

指が届く前に、千歳は腿からすべり下りた。轟の手首を両手で押し返して、一步さがる。それから奥を見た。園部は顔を溝へ向けたまま、棒を動かして音を立てつづけた。千歳は半歩ずれて、柱の陰に入った。奥から隠れたつもりらしかった。壁ぎわの園部からは、それでも体の前が斜めに見えた。

「自分でやるよ」

紐が解けた。股引が石の上に落ち、千歳はそれを足で横へのけた。首の後ろの紐も解いて、腹掛けを頭から抜いた。

園部は棒を動かしながら、目だけ上げた。

薄い胸に、小さな乳首。腹は平たく、へその下に毛は無い。そこにあるはずのちんぽも金玉も、千歳には無かった。なだらかな土手の下に、割れ目が一本、縦に通っているだけだった。

「傷じゃないよ。生まれつき。上は男で、ここだけ女をつくりなんだよ。……見たでしょ。これで全部。おれ、ほかに隠してる物は無いから」

千歳は腕を下ろしたまま、どこも隠さなかった。轟の体が前へ傾いて、腰掛けが鳴った。灰色ののどが一度、大きく動いた。

「……傷のほうだと思ってたな、俺は」

「外れだよ。乗るよ。これなら冷たくないでしょ」

千歳は床のぬか袋を拾ってから、自分で腿をまたいだ。裸の尻が灰色の皮に乗り、割れ目がじかに腿に当たった。丸い尾は、ぬれて毛がしぼんでいる。千歳は袋ごと、両手でちんぽを握った。

さっきより手が速かった。根元から先へ、先から根元へ、腕が上下するたびに千歳の腰も前後にずれる。そのたびに、まんこが轟の

腿の上をこすった。石けんの泡とは別の、とろりとしたまん汁の筋が、灰色の皮の上に光って伸びた。

「……そこは分かるな。俺の腿は、石を落としても気がつかない皮なんだ。それが今、お前がどこに乗ってるか分かるじゃないか。手より熱いんだな、そこは」

千歳は腰を浮かせようとした。足が床に届かないので、尻はすぐ元の所へ戻った。その拍子にクリが腿の皮にこすれ、千歳ののどが鳴った。

「んっ……」

「落ちるだろ。つかまれと言ったじゃないか」

轟の左手が千歳の背中に回って、腰の上を支えた。右手は自分のひざに置いたままだった。背を支えられた千歳は後ろへ逃げられなくなり、まんこを腿に押しつけたまま、両手だけを動かした。

ぐじゅ、ぐじゅ、ぐじゅ。ぬか袋が幹を上下する。しごき上げるたびに、先から汁があふれて、さらしにしみた。千歳は左手を下へやって、金玉を手のひらで持ち上げた。重い玉を指で一つずつ分け、裏の筋を付け根に向かって押していく。右手は袋ごと幹を握って、先の裏の筋に縫い目を当ててこすった。

「ふ、うゝ……そこだ。そこは、もっと強くていい。壊れやしないんだ、俺のは」

「……知ってるよ。昼に、背中さわったから」

千歳は先のふくらみを袋ごと包み、親指で口のまわりを円くこすった。にじんだ汁が玉になってこぼれる。千歳はそれを袋でぬぐって、また同じ所をこすった。ぬぐうそばから、口には次の玉がふくらんだ。

「そこは洗っても切りが無いぞ。俺は止め方を知らないんだ」

「……出るなら、出なくなるまで洗うよ。途中でやめたら、流しじゃないもん」

千歳の息が荒くなっていた。は、は、と短く吐いて、吸う時に鼻が鳴る。宙に浮いた両足は行き場をさがして、轟のふくらはぎにか

かかとを掛けた。そこを足がかりにして、千歳は握り方を変えた。袋を持った手ごと両の前腕で幹をはさみ、手首からひじまでを使ってしごき上げる。ひじの内側が根元に当たり、先は千歳のあごの下まで来た。腕を動かすほど腰が前へ出て、クリが腿の固い筋に乗り上げる。

「腕か。……そこまで乗られると、ひじの骨が当たってるのが分かる。手より重いな。もつと掛けていいぞ。俺は重いほど分かるんだ」

「旦那のは、手だけじゃ足りないんだよ。……足りないまま帰すのは、いやなんだよ。おれが」

言い終わらないうちに、千歳の尻が腿の上で跳ねた。前へ出すぎた腰を戻そうとして、クリを固い筋の上で引きずったらしい。

「っ、ふゝ……ん、んゝっ」

声がもれるたびに千歳は口を結び直し、腕をいつそう速くした。小さな乳首が立って、胸から腹へ汗と湯がいつしよに流れた。腿の上の光る筋は、もう尻の下いつぱいに広がっていた。

園部の棒は、いつのまにか止まっていた。園部はあわてて溝の底をこすった。千歳がこっちを見ることは無かった。

「千歳。その袋で先をくるんで、口をしぼれよ。お前が縫ったんだろ、それは」

「……そうだよ。おれが自分の金で、さらし買って縫ったんだよ。」

前の三助の辰さんのお下がりじゃ、ぬかがもれるから」

「園部さんに聞いた。だから、それがいいんじゃないか。お前が作った物の中に、お前の手で握られたまま出したいんだ」

千歳は手の中の袋を見た。何か言いかけて、やめた。袋の口を広げ、ちんぽの先にかぶせる。手のひらほどの袋には、先のふくらんだ所までしか入らなかった。千歳は前腕をほどいて、左手で袋の口をくびれにしぼり、右手で幹を握り直した。

それからの手は、園部が見たどの流しよりも速かった。右手が根元と袋の間を往復し、左手はしばった口ごと先をもみこむ。ぬかの

白い汁がしぼり出されて、千歳の指のまたから手首へ流れた。

「ぐ、うゝ……ああ、効く。千歳、効いてるぞ、それは」

轟の左手が、千歳の背を自分のほうへ引き寄せた。千歳の胸が轟の腹に付き、尻が腿の付け根まですべった。まんこが腿のいちばん固い所に押しつけられ、開いた割れ目の中でクリがつぶれた。

「あゝっ、……や、だんなゝ、押さ、ないで」

「離れてちゃ力が入らないだろ、お前も。落ちない所まで寄せたんだ」

言い合うあいだも、千歳の両手は同じ速さで動いていた。腰のほうは小さく前後に揺れて、ぬち、ぬち、と腿の上で音を立てた。泡

の音とは違う、ねばった音だった。

「なあ千歳。昼に左官が寝てたろ。あれを見て、俺は面白くなかったんだ。寝かせる手と、いま俺を握ってる手は、同じ手だろ。それなら俺は、寝ないほうをもらう」

「……寝てよ。寝たら、おれの勝ちなんだから」

「勝たせないよ。こんなに効いてるのに、寝られるわけがないだろ」
轟の首がのけぞり、角が天井を向いた。太い腿が千歳を乗せたまま持ち上がり、腰掛けの脚が石の上できしんだ。

「千歳。袋の口、しばってるよ。離すなよ。お前の縫い目がもつかどうか、俺も知らないんだ」

幹が千歳の手の中でふくれた。根元から先へ、太い脈が走るのが外からでも見えた。袋がいきなり丸くふくらみ、さらしの目から白いものが粒になって吹き出した。

「うゝ、おゝ……つ、ぐ、うゝ……」

轟が腹の底から声をしばった。脈は一度では済まなかった。打つたびに袋が重くなり、縫い目から、目の粗い所から、ザーメンがぬかの汁とまぎってあふれた。白くにごった筋が千歳の手首を下り、ひじを回って、千歳の内腿にぽたぽたと落ちた。

千歳は手を開けなかった。開けば袋ごと落ちて、中身が全部こぼれる。握ったままの手の中で、ちんぽは何度も跳ねた。轟の腿もい

っしょにびくりと固くなり、その上で千歳の腰が持ち上げられては落ちた。

「ひ、うゝ……っ、んゝんゝう」

千歳は歯を食いしばっていた。ふくらはぎに掛けたかかどが震えていた。まんこは腿に押しつけられたまま、持ち上げられるたびにこすれて、新しい筋を灰色の皮に引いた。

脈が遠くなって、やっと止まった。轟は長く息を吐いて、千歳の背から手を離した。

「……寝なかったな、今度も。寝るどころじゃないじゃないか、こんなのは」

千歳は答えなかった。袋を握ったまま腿から下り、石の上に立った。ひざが一度折れかけて、柱に肩を付けた。握った手の下から、白いしずくがまだ落ちていた。

轟は立って、おけの湯を頭からかぶった。手ぬぐいを肩に掛け直す。

「袋の代は付けとけよ。新しいさらしを買う分だ」

戸が開いて、閉まった。階段を上がる重い足音が、天井の向こうへ消えた。

千歳はしばらく柱にもたれていた。それから袋を空のおけの底に置き、腕と腹と内腿に湯をかけて、白いものを溝へ流した。ぬれた

腹掛けをかぶって紐を結び、股引に足を通す。全部済んでから、千歳は柱の陰から出てきた。

「園部さん。札、あった？ 溝、詰まってなかったでしょ」

「無かったよ。溝じゃないね、これは」

「じゃあ下足箱の釘じゃない？ 前も、隣の札の下に重なってたでしょ」

園部は棒を持って、千歳の前を通って戸を出た。釘を見ると、二十八番の札の下に、二十七番が重なって掛かっていた。

戸じまりをして裏へ回ると、釜場に灯がついていた。土間の壁には、釜番が湯かげんを聞く小窓が一つ、湯船のほうへ開いている。

千歳は湯上がり浴衣を引っかけて、たき口の前にしゃがんでいた。髪も耳もまだぬれている。手には、口をしぼったままのぬか袋があつた。ふくれて、下のほうがまだらに白い。

千歳はそれを火の中へ放つた。じゅう、と音がして、ぬかの焦げるにおいが土間に広がつた。

それから千歳は道具箱を引き寄せて、さらしの反物を広げた。自分の腕を布の上に置き、ひじから指の先までの長さの所に、はさみを入れた。

「ちとせ、わたしは帰るよ。火の始末だけ頼むよ」

「うん。おつかれ、園部さん」

針が動きだした。速かった。千歳は布から目を上げなかった。

「……小さかったんだよ、前のは」

第02話

小刀が竹の節に引っかかった。孫に竹とんぼを頼まれたのは何日も前で、園部はまだ羽の片方しか削れていない。

のれんはもう入れてある。最後まで浸かっていた瓦屋のじいさんが、番台の前で下駄をはきながら振り向いた。

「園部さんよ。新しい旦那は毎晩しまい湯に入るんだな。あれじゃ、ちとせの入る湯が無くなるだろう」

「旦那が上がったあとに入ってるよ、あの子は」

「そうかい。あれは一人で入りたがるからな。……湯はいいよ。前よりずっと熱い。まきをけちらなくなった」

じいさんが帰ると、洗い場からは湯の音だけが聞こえた。轟が湯船に浸かっている。千歳は流し場でおけを洗っているらしく、すりガラスに耳の長い影が行ったり来たりしていた。

「千歳。上がるぞ。今夜は道具はいらないからな」

戸ごしに轟の声がした。大きな声ではないが、石の洗い場ではよく通る。

「……知らないって。じゃあ何を使うの、旦那」

「手はもう知ってる。お前が一番やわらかい所で洗ってみろよ」

おけを置く音がした。千歳の返事は聞こえなかった。

園部は羽の先を削りながら、鼻をひくつかせた。煙のにおいがある。釜の火だ。いつもなら千歳がしまい湯の前に落とす火が、今夜はまだ燃えている。放っておけば湯が煮えて、まきも無駄になる。

園部は竹と小刀を持ったまま、裏へ回った。

釜場は土間で、たき口の中では太いまきが、まだ赤く燃えている。園部は火かきで燃えさしを手前へ引いた。灰をかぶせられるほど火が細るまで、待つしかない。まきの山に腰を下ろすと、頭の横に、あの小窓がある。のぞけば湯船がすぐ下に見える。板戸は湯気を逃がすために半分開いていた。

声は、その窓からじかに来た。

「縫い直したのか。大きいな。……それは置いとけよ。使う晩もあるだろうが、今夜じゃない」

小窓から見て左手の縁に、轟は横顔を見せて腰かけていた。足は洗い場の石の上にあり、手ぬぐいは縁にたたんで置いてある。上がったばかりの灰色の皮から湯気が立っていた。その前に千歳が立っていた。腹掛けに股引、手には新しいぬか袋。前のより、ずっと長い。

「……どこのこと。一番やわらかい所って」

「この前、見せてくれた所だよ。俺の腿は、あそこが乗った時だけ分かったんだ。お前の手は効く。だが手は、皮の上からだろ。あそこは皮の下まで来た。あれで洗われたら、俺の皮でも全部分かるんじゃないかと思ってな」

「洗う道具じゃないよ、あれは」

「道具なら買ってくる。金で買えないから、お前に言ってるんじゃないか」

千歳は袋を握ったまま、戸のほうを見た。戸は閉まっている。脱衣場の灯は、園部が出る時に細くしてきた。

「それとも手でやるか。手なら俺はもう知ってる。知ってる手じゃ、俺は寝ないぞ。お前、俺を寝かせたいんだろ」

千歳は袋を縁の上に置いた。

「……寝たら、そこでやめるからね」

腰の紐を解いて、股引を足から抜く。腹掛けは着たままだった。すそはへその下までしか無い。丸い尾と、毛の無い土手と、その下の割れ目が、釣り灯の下に出た。

千歳は言われる前に、尻を出したまま流し場まで歩いた。おけに上がり湯をくみ、石けんを入れて、両手で抱えて戻ってくる。湯がゆれて、腹掛けのすそをぬらした。

「そのおけ、足もとに置いてまたげよ。下を向けば、おけの湯にお前のが映るじゃないか」

千歳はおけをまたいで、しゃがんだ。ひざが左右に開く。石けんを持った右手が、腿の間に入った。顔は横の壁を向いていた。

「下を見ろよ。見たこと無いのか、自分のを」

「……無いよ。用が無いもん」

「俺はこれから、それに洗われるんだぞ。どんな物か、持ち主も知らないじゃ困るだろ」

千歳はあごを引いて、おけの中を見た。長いこと動かなかった。石けんを持った手だけが、のろのろと割れ目の上を行き来した。泡

のしずくが、ぽたり、ぽたりと湯に落ちた。

「……ゆれる。落ちるたんびに、くずれて見えないよ」

轟は待っていた。しずくの落ちる間があいて、湯の面が静まった。

「……縦に、割れてる。中が赤い。上に、小さいのが付いてる。……旦那、もういいでしょ、これ」

「よくないな。俺の腿に乗るのは、その小さいのもだろ。そこに一番、さわりたいんだ、俺は。泡を付けといってくれなきゃ、すべらないじゃないか」

千歳は目をそらした。そのとたんに手もとが狂って、石けんの角がクリをはね上げた。

「ひっつ……！」

腰が跳ねて、石けんが手から飛んだ。石の上をすべって、轟の足に当たって止まる。轟は足の指でそれを押し返した。両手は縁に付いたままだった。

「見てないから、そうなるんだ」

千歳はひざをついて石けんを拾い、またおけをまたいだ。今度は下を見たまま、割れ目を左手の指で開いて、石けんを縦に当てた。入り口からクリまで、こすり上げては下ろす。白い泡が土手に盛り

上がり、内腿を伝って、おけの湯をにもらせた。千歳の息が鼻から細くもれていた。

「外だけか。俺の皮は厚いんだ。浅い泡じゃ、乗られても分からないいかもしれないだろ。中のやわらかい所まで、俺に当ててほしいんだよ。手を抜かないで、全部だ」

「……中は、洗う所じゃないよ」

轟は言い返さなかった。身を乗り出して、おけの上の千歳を見ているだけだった。千歳の手が止まった。それから石けんを左手に持ちかえ、泡を右の中指にたっぷり取った。おけの中を見たまま、その指を入り口に当てる。指は節の一つめまで入って、止まった。

「っ……ん」

ひざが震えて、おけの湯にしずくが続けて落ちた。千歳は指をゆっくり回し、泡を入り口のふちに塗りこめて、抜いた。その指は節の一つめまで、泡とは違うもので光っていた。千歳はすぐにその手をおけの湯に突っこんだ。

「映ってたか」

「……見てたよ。旦那が見ろって言うから。……口みたいだった。指、くわえて。自分のじゃないみたいだよ、あんなの」

轟は節が白くなるほど、縁の石の角を握っていた。腹の前で、ちんぽがゆっくり起き上がって、灰色の幹に筋が浮いた。

「……立ったよ、泡。乗るよ」

千歳は立って、轟の右の腿をまたいだ。泡だらけのまんこが灰色の皮に乗る。ぬれた腹掛けが胸に張りついて、千歳は首の紐を自分で解き、頭から抜いて縁へ放った。

「じゃまなんだよ、これ」

裸になった千歳は、轟の肩に両手を置いた。

「つかまるのはいい。だが手でこすったら、昼と同じだろ。今夜は手じゃない所で、俺をやるんじゃないのか」

千歳は肩の手を握り直した。

腿の付け根に体の重みを全部かけて、腰を小さく回す。先に押し
てほぐし、それからこする。千歳の流しの順番だった。割れ目が開
いて、中のやわらかい所が厚い皮にじかに付く。ぐちゅ、と泡がつ
ぶれた。

それから、付け根からひざへ向かって長くすべった。腰を引い
て、また付け根へ戻る。行きはクリが皮のしわに引っかかり、帰
りは入り口がめくれる。ぐちゅ、ぬちゅ、と音がするたびに、千歳の
背すじがびくりと伸びた。

「……来てるな。やっぱり分かる。そこが通った所だけ、皮の下が
熱くなるじゃないか。背中より効くぞ、これは」

「っ、ふ……効くなら、寝てよ……」

「寝ないよ。目が覚めるほうの効き方だ、これは。……千歳、お前まだ、肩の手で重さを逃がしてるだろ。全部乗せろよ。俺は重いほど分かるんだ。加減されるのは、もうたくさんなんだ」

轟の腿が下から持ち上がって、千歳のまんこを迎えにいった。固い筋がクリごと割れ目を押し上げ、千歳のつま先が石から離れた。

「ひ、あゝっ……！ の、乗せてる、乗せてるよゝ、ぜんぶ……！」

「……ああ。来た。今のは腰の骨まで来たぞ」

千歳は口を結んで、腰を速めた。腿の上に、泡とまん汁のまざった白い道が出来た。轟の腹の前では、ちんぽが立ちきって、赤黒い

先を千歳のへそに向けている。千歳はそれを見ないで、ひざのほうへ下がった。

「ひざは、皿のふちに垢がたまるんだよ。……みんな、自分じゃ洗わないから」

千歳はひざ頭にまたがり直した。丸い骨を割れ目でくるんで、腰で円を描く。固い皿の角がクリを下から押し上げた。

「んっ、ん、ん……」

円は途中で崩れた。千歳は轟の肩に額を付けて息を継ぎ、それからすねへ下りた。両腕で轟の腿を抱え、すねの骨の上をしゃがんだ

まますべり下りる。骨の峰が割れ目にまっすぐ食いこんで、千歳の尾がぶるぶる震えた。

「うゝ、う……かたい、ここ……」

「すねは皮が薄いんだ。骨の上をお前が通ってるのが、いちいち分かる。入り口と、その上の粒と、別々に分かるぞ」

千歳はすねを上へ戻って、もう一度下りた。流しの時のまま、同じ道をしていねいに重ねる。ただ、一往復ごとに腿を抱える腕に力が入り、頬が轟のひざに押しつけられていった。すねの灰色の皮には、白い泡の帯の真ん中に、ぬれて光る細い筋が一本通った。

足首まで来ると、千歳は轟の足の甲にしゃがみこんだ。両手を後ろの石について、腰を支える。

「……足の指はね、客でもくすぐったがるから、強くやるんだよ。指のまたまで、一本ずつ」

千歳は腰を前へ送って、小指と薬指の間にクリを押しこんだ。前後に小さくこする。腰を浮かせて、次のまたへ移る。指のまたを一つ越えるごとに、入り口が太い指の背に引っかけかけて、ぬぷ、と開いた。

「あゝ……っ、は、あゝ」

「くすぐったいな。……足の指のまたなんか、自分でも洗ったことが無いぞ。そんな所まで、お前のやわらかいのが来るのか」

轟の親指が曲がった。指の腹が入り口を下から押し上げ、千歳の腰ががくんと落ちた。

「お………！　だ、旦那、指、動かさないで………洗えない、から」

「くすぐったいと曲がるんだ。わざとじゃないぞ」

千歳は歯を食いしばって、親指のまたまでこすり切った。立とうとして、ひざが笑った。

「左もだろ。右だけ分かるようになって帰されるのは、気持ちが悪
いじゃないか」

千歳は左の腿へ回った。今度は轟に背を向けてまたがり、両手を
轟のひざに突っぱった。尻を後ろへ突き出して、付け根からひざま
で一息にすべる。ぬれてしぼんだ尾が、轟の腹の前で上下した。さ
っきの倍は速かった。ぬちゅぬちゅぬちゅ、と音がつながり、千歳
の肩がそのたびにすくんだ。

「速いな。右とやり方が違うじゃないか」

「……同じだよ。左は、旦那がかばってて、こってないから。こっ
てない所は、長くやらないの。……それだけ、だよ……」

ひざまで来た所で、轟の手が千歳の腰をつかんで止めた。

「左はそこまでいい。泡が残ってるじゃないか、お前のほうに」

轟は縁に置いた手ぬぐいの下から、垢すりの布を出した。流し場から持ってきていたらしい。麻を粗く織った、手のひらほどの布だ。

「流す前に垢すりをかけるのが順番だろ。昼に、お前がそうやって」

轟は千歳を腿から下ろし、湯船の手前の縁の前に立たせた。縁は千歳のひざより低い。千歳は湯のほうを向かされ、小窓からは体の

正面がそっくり見えた。泡の残る土手の下で、内腿がひざの上までまん汁で光っていた。

轟はその後ろに片ひざをついた。左腕を千歳の胸の前に回して、右の肩をつかむ。右手は垢すりの布を二本の指に巻いて、腰の横から前へ回した。千歳は両手で、胸の前の太い腕にしがみついた。

布は、まず内腿に当たった。ひざの上から付け根へ、右、左とこすり上げる。泡といっしょに、まん汁のぬめりがこそげ取られた。次に土手。毛の無いふくらみを、布が上から下へ掃いた。千歳の腹がひくりと引っこんだ。

「大きい所から先にやるんだろ。小さい所は最後だ。見て覚えたんだ、昼に」

布は割れ目の右のふちを下り、左のふちを上がった。ふっくらした肉が布に引かれて片方ずつめくれ、中の赤い所が釣り灯の下に出た。それから後ろへ回って、入り口と尻の穴の間を越え、尾の付け根の下まで行って戻ってきた。千歳はつま先立ちになっていた。

「……っ、は、あ……旦那、そんなとこまで、客には、やらないよ……」

「客にはやらない所まで、俺はもうやってもらったぞ。足の指のまただ。もらった分は返すもんだろ」

一回りして、布がクリの上に来た。指に力が入って、ごしりと動いた。

「いっ……！　旦那、それ、痛いだけ。……痛いのと効くのは、別なんだよ」

「別なのか。だれに習ったんだ、それは」

「……辰さん。前の三助。おれは、手をはたかれましたけど」

「じゃあ教えろよ。どうやれば効くほうになるんだ。俺は加減が分からないんだ。痛いだけで帰されるのがどんなものかは、よく知ってる。お前にそれをやりたくない」

千歳はしばらく黙っていた。小窓の下で、湯の面が静かになった。

「……押さないの。布の重さだけ。……下から、上へ」

指がゆるんだ。粗い布が、クリの根もとから先へ、ゆっくりなで上げた。

「んゝうつ……」

「こうか。……軽いな。これで本当に届くのか、お前には」

もう一度、下から上へ。泡をふくんだ麻の目が、小さな粒を一目ずつ乗り越えていく。千歳の腹がへこみ、腿の内側に筋が浮いた。

「……あつて、るゝ……っ」

轟は言われたとおりの軽さで、同じ所を同じ向きにみがきつづけた。きゅ、きゅ、と布が鳴る。千歳のひざが内へ入り、尻が後ろへ逃げる。そこには轟の腹があった。背中には立ち上がったちんぽが熱い棒になって張りついていて、それより後ろへは下がれなかった。

轟の息が、千歳の首の後ろに当たっていた。荒くはないが、熱くて長い。千歳の背中では、ちんぽの先からにじんだ汁が背骨のくぼみをぬらして、尾の上まで流れていた。轟はそれを押しつけもこすりつけもせず、右手の布だけを動かした。

「千歳。俺の腕じゃなくて、首をつかめよ。爪を立てていい。お前が効いてる時にどこをどうつかむのか、俺の皮で受けたいんだ」

千歳の右手が腕を離れて、後ろへ回った。轟のうなじをさぐり当て、厚い皮に指を食いこませる。布がクリをなで上げるたびに、五本の指がぎゅっと締まった。

「ふ、うゝ……それだ。加減が無いな。……いいぞ、そのまま握つてろ」

園部は小窓から顔をそむけて、たき口の火を見た。声は耳に入ってきた。

「うゝ、うゝ、あゝ……つ、だん、なゝ、布、目が、荒いゝ……」

「そこが一番、俺の指に返事をするんだ。ほかの所へ行く気にならないじゃないか」

布が向きを変えた。クリのまわりを円くたどり、皮をめくって、出てきた先を布の角でくるむ。千歳の頭が後ろへ倒れて、長い耳が轟の肩に掛かった。

「おゝっ、あゝ、あゝあ……！ や、それ、むけ、てる、のゝ……！」

たん、と音がした。

園部は音につられて、また小窓をのぞいた。

千歳の右のかかとだった。つま先で立ったまま、かか手が勝手に石を打ちはじめた。たん、たん。たたん、たたん。左のかかとも加わって、速い二つ打ちが洗い場じゅうに響いた。千歳は自分の足を見下ろしたが、足は止まらなかった。

「だ、旦那、だめ、なんか来る、出る……！　湯、湯がよごれる、どいて、おれ、どく、から……！」

「よごれたら抜けばいいだろ。まきは俺が出す。そのまま出せよ、湯船まで」

轟の腕が千歳の胸を締めて、動けなくした。布は止まらなかった。

「あゝ、あゝあゝ……！ おゝ、おゝ……っ！」

千歳の腰が前へ突き出た。割れ目から透明な水が一本、細く強く飛んだ。低い縁を越えて、湯の面にぱしゃつと当たる。続けて次のが、もっと遠くへ飛んだ。

小刀が竹に深く入った。園部の手の中で、羽の片方がそげて薄くなった。

潮は止まらなかった。布がひとなでするたびに、びゅっ、びゅっ
と吹き出して、湯船に輪を広げる。輪は小窓の下の壁まで寄せてきた。かかとは石を打ちつづけ、千歳の声は言葉にならなかった。

「おゝ……っ、あゝ、あゝう……ひ、いゝ……」

最後は勢いが無くなって、内腿をだらだら伝って足もとの石をぬらした。かかとの音が間遠になり、やんだ。千歳は左手で轟の腕に、右手でうなじにぶら下がって、ひざから下に力が入らないようだった。

轟は腕をゆるめて、千歳をそっと石の上に下ろした。指に巻いた布をほどく。麻は水を吸って重くなり、端からしずくが垂れていた。轟はそれをしばらくずに、縁の上へ広げて置いた。それから湯の面を見ていた。

「……俺の手でも、効くほうになるんだな。相手の体が返事をする
と、手を止められなくなるもんだ。首のここに、お前の指の跡が残

ってる気がするぞ。皮の下にな」

千歳は縁の前の石に座りこんだまま、肩で息をしていた。足の裏は両方とも赤い。やがて顔を上げて、湯船を見た。

「……抜く」

「今からか。朝でいいだろ、そんなのは」

「朝は、じいさんたちが来るんだよ。……おれのが入った湯に、入れられないでしょ」

千歳は壁のかぎ竿を取り、湯船の底の栓を引き抜いた。ごぼ、と湯が鳴って、面が下がりはじめた。

釜の火は、もう灰をかぶせられるほど細っていた。園部は燃えさしに灰をかぶせて、たき口のふたを閉めた。

小窓の下では、湯が抜けきっていた。千歳は裸のまま、へちまを持って湯船の底に下りた。奥の角にひざをつき、四つんばいになって石を磨きはじめる。底はまだ温かく、ぬめっていた。

轟は手前の縁に腰かけ直して、両足を湯船の中へ下ろした。手ぬぐいを肩に掛け直しただけの裸で、ちんぽはまだ半分立っている。それを自分でどうにかする様子は無かった。

「……旦那のは。出さないの、今夜は」

千歳は磨く手を止めなかった。

「手を出すのは、もう知ってる。……それに、いま握られたら、俺は寝るかもしれないんだ。お前に流された晩に寝たことが無いから、分からないが。寝たらそこでやめると言ったら、お前。やめられるのは困る」

千歳は返事をしないで、へちまを強く押した。

腕の動きに合わせて、千歳の尻が前後した。開いたままのまんこから、残りの汁がつうつと垂れて、磨いたばかりの石に落ちる。千歳は気づくたびに後ろへ下がって、そこを磨き直した。

「きれいにしちまうんだな。お前の出した物は、あとに何も残らないじゃないか」

「……残さないよ。残ってたなら、湯守がいる意味ないでしょ」

千歳は底を奥から手前へ磨いてきた。ひざを送るたびに、赤い足の裏が石の上で向きを変える。乳首が底のぬめりをかすり、垂れた耳の先が石をなでた。轟は縁の上から、その背中と尻と、間で光っている割れ目を、黙って見下ろしていた。大きな手が一度、千歳の背へ伸びかけて、縁の石へ戻った。

千歳は轟の足の前で止まった。股引と腹掛けは、ぬか袋と並べて左の縁に置いたままだった。

「……足も、ついでだから」

千歳はへちまを轟の足の甲に当てた。さっき自分のまんこでこすった指のまたを、今度はへちままで一本ずつ磨いていく。轟の指は曲がらずに、じっとしていた。

磨いていない石は、轟の足の下だけになった。

轟は何も言われないうちに、両足を上げた。

千歳はへちまを持ち直して、その下を磨いた。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 湯守、湯屋を買った犀の主に主流しでまんこを使われ潮を吹く

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026・10・10

レーティング R18